

博 多 152

—博多遺跡群第198次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1270集

2015

福岡市教育委員会

HAKA TA
博 多 152

—博多遺跡群第198次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1270集



遺跡略号 HKT-198
調査番号 1324

2015

福岡市教育委員会



(1) 薙石検出状況（東から）



(2) 薙石検出状況（北東から）

序

玄界灘に面して広がる福岡市は、古くから大陸との文化交流の門戸として発展を遂げてきました。福岡市内には数多くの歴史的・文化的遺産が残されており、それらを保護し、後世に伝えることは、現在に生きる私どもの責務であります。本市では、著しい都市化の中で失われてしまう埋蔵文化財の発掘調査を実施し、記録保存によって後世まで伝えるよう努めています。

本書は、立体駐車場建設に伴って実施した博多遺跡群第198次調査について報告するものです。今回の調査では、古墳時代に造られた前方後円墳の一部を確認するとともに、平安時代から戦国時代にかけての中世都市「博多」の一部を確認し、埴輪や貿易陶磁器を中心とする遺物が出土しました。これらは対外交流の拠点として発展してきた博多の歴史を解明していく上での重要な資料となるものです。今後、本書が文化財保護に対する理解と認識を深める一助になるとともに、学術研究の資料としてもご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査から本書の作成に至るまで、事業主である西日本鉄道株式会社様、施工の株式会社竹中工務店様をはじめとする関係者の方々にはご理解とご協力を賜りました。心から感謝申し上げます。

平成27年3月25日

福岡市教育委員会
教育長 酒井 龍彦

例　言

1. 本書は、福岡市博多区御供所町70-1・70-2番地内において、福岡市教育委員会が立体駐車場建設工事に伴い、平成25（2013）年9月17日から同年10月23日にかけて発掘調査を実施した博多遺跡群第198次調査の報告書である。
2. 発掘調査および整理・報告書作成は、民間受託事業として実施した。
3. 報告する調査の基本情報は下表のとおりである。
4. 本書に掲載した遺構の実測図作成は、吉田大輔・佐々木蘭貞が行った。
5. 本書に掲載した遺物の実測図作成は、吉田・谷直子・相原聰子が行った。
6. 本書に掲載した遺構および遺物写真的撮影は、吉田が行った。
7. 本書に掲載した挿図の製図は、林由紀子・谷・相原・吉田が行った。
8. 本書で用いた方位は磁北で、真北より $6^{\circ}40'$ 西偏する。
9. 調査で検出した遺構については、土坑をS K、井戸をS E、溝をS D、集積遺構をS Xとし、通し番号を付している。また、古墳の葺石については葺石A・Bとした。
10. 本書で記述する遺物の分類、説明等については以下の文献を参考とした。
太宰府市教育委員会 2000『太宰府条坊跡X V-陶磁器分類編』太宰府市の文化財第49集
11. 本書に関わる記録・遺物等の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵されるので、活用されたい。
12. 本書の執筆および編集は吉田が行った。

遺跡名	博多遺跡群	調査次数	第198次	遺跡略号	H K T-198
調査番号	1324	分布地図幅名	049天神	遺跡登録番号	0121
申請地面積	99.3m ²	調査対象面積	52m ²	調査面積	43.3m ²
調査期間	平成25（2013）年9月17日～10月23日	事前審査番号	25-276		
調査地	福岡市博多区御供所町70-1・70-2番				

本文目次

I.はじめに	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の組織	1
II. 遺跡の立地と環境	2
III. 調査の記録	4
1. 概要	4
1) 調査の経過	4
2) 調査の概要と層序	4
2. 遺構と遺物	4
1) 第1面	4
(1) 土坑（SK）	4
(2) 井戸（SE）	7
(3) 溝（SD）	10
(4) 土師器集積遺構（SX）	11
2) 第2面	12
(1) 前方後円墳（博多1号墳）	13
IV. 結語	20

挿図目次

第1図 調査区位置図（1）（1/1,000）	2
第2図 調査区位置図（2）（1/200）	3
第3図 調査区南壁・東壁土層実測図（1/40）	3
第4図 第1面および第2面調査区全体図（1/80）	5
第5図 SK22・26・28・34実測図（1/40）	6
第6図 SK22・26・28・34出土遺物実測図（1/2、1/3）	7
第7図 SE29・30・31実測図（1/40）	8
第8図 SE29・30・31出土遺物実測図（1/2、1/3）	9
第9図 SD32実測図および出土遺物実測図（1/3）	10
第10図 SX38実測図（1/40）	10
第11図 SX38出土遺物実測図（1/3）	11
第12図 周辺調査地の葺石検出状況および博多1号墳復元図（1/600）	12
第13図 葦石A列・葺石B列実測図（1/40）	13
第14図 墳輪出土位置図（1/80）	14
第15図 墳輪実測図（1）（1/3）	15
第16図 墳輪実測図（2）（1/3）	16
第17図 墳輪実測図（3）（1/3）	17
第18図 墳輪実測図（4）（1/3、1/4）	18
第19図 須恵器実測図（1/3）	19

巻頭図版目次

巻頭図版（1）葺石検出状況（東から）
巻頭図版（2）葺石検出状況（北東から）

写真図版目次

図版1 （1）第1面調査区全景（東から）
(2) 葦石検出状況（南東から）
(3) 葦石検出状況（南から）
(4) 葦石A列（東から）
(5) 葦石B列（東から）
(6) 葦石A列 トレンチ南壁土層（北から）
(7) 墳輪群①～③出土状況（東から）
(8) 葦石B列 墳輪出土状況（東から）

図版2 出土遺物

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

平成25（2013）年4月18日に、福岡市博多区御供所町70-1・70-2番地内における立体駐車場建設に伴う埋蔵文化財の有無についての照会が西日本鉄道株式会社より福岡市経済観光文化局文化財部埋蔵文化財審査課宛てになされた。これを受け同課事前審査係は、申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である博多遺跡群に含まれていること、試掘調査で現地表面下1.65～1.80cmで遺構が確認されたことから、遺構の保全等に関して申請者と協議を行った。その結果、申請面積99.3m²のうち、52m²については埋蔵文化財への影響が回避できることから、同箇所を対象に記録保存のための発掘調査を実施することになった。また、本調査に先立ち、申請者が土留め工事や表土剥取りを行うこと等の協議も進めた。

その後、平成25年9月6日付で西日本鉄道株式会社を委託者、福岡市長を受託者として埋蔵文化財調査業務委託契約を締結し、同年9月17日から発掘調査を、翌平成26年度に資料整理および報告書作成を行うことになった。

2. 調査の組織

調査委託 西日本鉄道株式会社

調査主体 福岡市教育委員会

（発掘調査：平成25年度・資料整理：平成26年度）

調査総括	文化財部埋蔵文化財調査課	課長	宮井善朗（25年度）
			常松幹雄（26年度）
		同課調査第2係長	榎本義嗣（25・26年度）
庶務	文化財部埋蔵文化財審査課	管理係長	和田安之（25年度）
			内山光司（26年度）
		管理係	川村啓子（25・26年度）
事前審査	文化財部埋蔵文化財審査課	事前審査係長	加藤良彦（25年度）
			佐藤一郎（26年度）
		同課事前審査係主任文化財主事	佐藤一郎（25年度）
			池田祐司（26年度）
		同課事前審査係文化財主事	森本幹彦（25年度）
			板倉有大（26年度）
調査担当	文化財部埋蔵文化財調査課	調査第2係文化財主事	吉田大輔
発掘作業	小野千佳 香月隆 兼田ミヤ子 豊丸秀仁 野口リウ子		
整理補助	相原聰子 谷直子		
整理作業	有島美江 林由紀子 松尾トシエ		

II. 遺跡の立地と環境

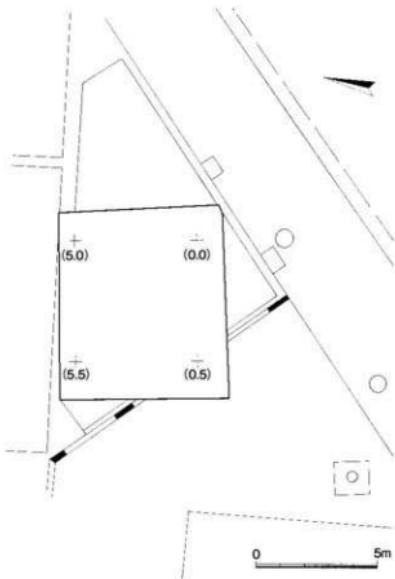
博多遺跡群は、中世都市「博多」を主として、弥生時代から近世、さらには近現代に至るまで連続と続く複合遺跡である。本遺跡群は、玄界灘に面する博多湾岸に形成された古砂丘上に位置し、西を博多川（那珂川）、東は江戸時代に開拓された石堂川（御笠川）、南は石堂川開拓以前に那珂川に向かって西流していた旧比恵川（御笠川）によって区画されている。本遺跡群の立地する砂丘は大きく3列に分けられ、内陸側から砂丘Ⅰ、砂丘Ⅱ、砂丘Ⅲと呼称される。このうち、砂丘Ⅰと砂丘Ⅱは「博多浜」と仮称され、両者は南西側から北東にのびる狭長な谷部によって区分される。また砂丘Ⅲは「息浜」と呼ばれ、砂丘Ⅱの前面に連れて形成された砂丘である。

今回報告する第198次調査区は、砂丘Ⅰの北東から南西方向に延びる尾根頂部の最高所付近に立地している。調査区の位置する「博多浜」で確認されている本格的な生活の痕跡は、砂丘Ⅰと砂丘Ⅱを分ける谷に面した頂部において、弥生時代中期前半の集落および斎棺墓地として認められる。しかし、それらは中期中頃までの比較的短期間に営まれ、その後、終末期から古墳時代前期にかけては砂丘Ⅰを主体として、砂丘Ⅱの南半に集落が盛行し、方形周溝墓等の埋葬遺構も検出されている。続く古墳時代中期には、本調査区の南西側に隣接する第28次・31次調査区で確認され、本調査区でも検出された5世紀前葉に位置づけられる全長56m以上を測る前方後円墳（博多1号墳）が築造される。墳丘の大半は削平され、主体部については不明だが、基底部には葺石が認められ、円筒および形埴輪が出土している。また、本調査区の南東側の37次調査区ではほぼ同時期の滑石製玉類を副葬した木棺墓が検出されている。さらに、本調査区北東側の第109次調査区では、前方後円墳の可能性を有する遺構および方形周溝墓と考えられる遺構が検出されている。出土した円筒埴輪は川西安幸氏の編年のIV期、実年代では5世紀後半に位置づけられる。該期における博多浜はこれら墓地としての利用が顕著に認められる。6世紀後半には再び集落としての展開がみられ、律令期には砂丘Ⅰの頂部において区画溝が出現している。石帶、帶金具、瓦等の出土例から官衙等の存在が想定されている。平安時代後

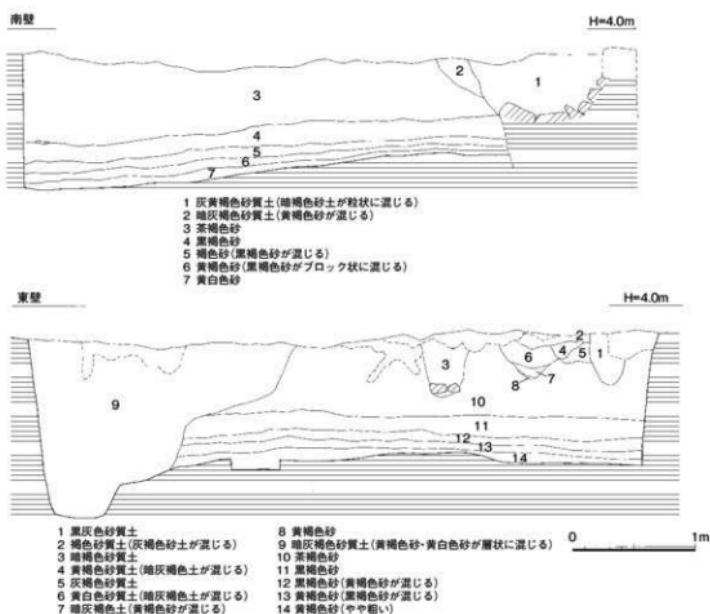


第1図 調査区位置図(1)(1/1,000)

半から末期には鴻臚館から貿易の拠点が博多浜に移り、西側一帯にはその港湾城や「博多津唐房」の存在が推定されている。また宋商人の居留と活発な貿易活動によってもたらされた、膨大な量の輸入陶磁器の出土が各調査区で確認されている。砂丘Ⅱにおいては、12世紀後半に出現した区画溝が中世後半には砂丘Ⅱと砂丘Ⅰとを結ぶ基幹道路として継承され、道路整備・町割の基軸をなしている。博多綱首らにより建立された聖福寺、承天寺という二大寺院、さらに櫛田神社の存在も当該期の街区形成に大きな影響を及ぼしていると考えられる。南北朝期には博多の都市機能の中心は息浜へと移っていくが、博多支配をめぐる諸大名の争いにより、博多は幾度も戦火に見舞われており、これは戦国期に位置づけられる焼土層によっても明らかである。その後、秀吉による復興と町割がなされ、近世博多へと続していく。



第2図 調査区位置図(2)(1/200)



第3図 調査区南壁・東壁土層実測図(1/40)

III. 調査の記録

1. 概要

1) 調査の経過

博多遺跡群第198次調査区は、博多区御供所町70-1、70-2番に所在し、調査前の現況は駐車場で、標高は約6mであった。発掘調査は平成25(2013)年9月17日に開始した。まず、鋼板による土留め工事および重機による表土除去から開始した。重機によって、地表下約1.5~1.8mまで掘り下げたところで確認した遺物包含層上面を第1面として設定し、人力による遺構の検出、掘削を行い、第2面まで確認した。各面で検出した遺構は適宜、写真撮影を行い、また1/10・1/20の実測図を作成して記録した。同年10月23日にすべての作業と機材等の搬出が終了し、調査を完了した。調査対象面積は「I.-1. 調査に至る経緯」で先述したように53m²であったが、鋼板による土留めから1mほど引きをとって調査を行ったため、実際の調査面積は43.3m²であった。

2) 調査の概要と層序

本調査区は、「II. 遺跡の立地と環境」でも前述したように、博多遺跡群の立地する3列の砂丘のうち、もっとも内陸側の砂丘Ⅰ北東部の砂丘尾根上に位置している。この砂丘尾根は、隣接する第28次・31次調査区でも確認されている博多1号墳から、本調査区の北東側に位置する第109次調査区の北西部を結ぶような形で延びているものと考えられる。

基本的な層序と調査時に設定した各調査面を第3図に示した調査区壁面、主に南壁面の土層に基づき説明する。土層図の上面は重機による鋤取り面で、調査区の中央付近から東側と西側で土層の堆積状況が大きく異なる。中央から西側には1・2層が、東側には3層が堆積するが、1・2層は調査区側ではコンクリート杭による攪乱を受け検出できなかった遺構の覆土であると考えられる。土層図には表れていないが、調査区西側では暗灰褐色から暗褐色砂質土の遺物包含層上面で遺構を検出している。そこから15~20cm掘り下げたところで基盤となる砂層7層が確認できた。東側では茶褐色砂質土の3層以下6層がやや東側に傾斜しながらほぼ水平に堆積する。第1面は、1層および3層上面の標高約3.8~3.9m付近に設定した。14世紀代に位置づけられる土師器の集積遺構や13~14世紀代の土坑、井戸、ピット状遺構が検出された。また、近世や近代の井戸も確認されている。

2. 遺構と遺物

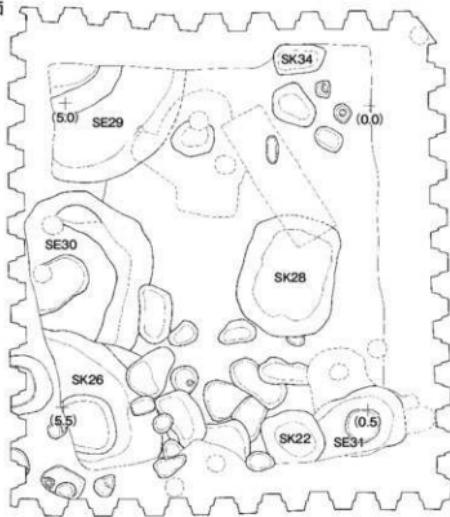
1) 第1面(第4図) 先述のとおり1・3層上面の標高3.8~3.9m付近に設定した面である。13~14世紀の遺構を主体に確認した。また報告からは割愛するが、近世や近代の井戸も数基検出している。

(1) 土坑(SK)

SK22(第5図) 調査区の南西隅付近に位置する土坑で、西側は調査区に続く。長軸1.1m、短軸0.9mの不整な楕円形を呈する。深さ0.5m程度を測る。南側でSE31と重複し、これよりも新しい。

出土遺物(第6図1~3) 1は底部糸切りの土師器壺で、器面は内外面ヨコナデ調整で、底部には板状圧痕が残る。2は瓦玉で、上面には布目が残る。3は白磁碗V類とみられ、口縁部は外側に屈折し、上端部はほぼ水平に仕上げられる。この他、龍泉窯系青磁碗III類や瓦等の小片が出土した。以上の出土遺物から13世紀後半~14世紀前半の土坑に位置づけられよう。

第1面



第2面



0 2m

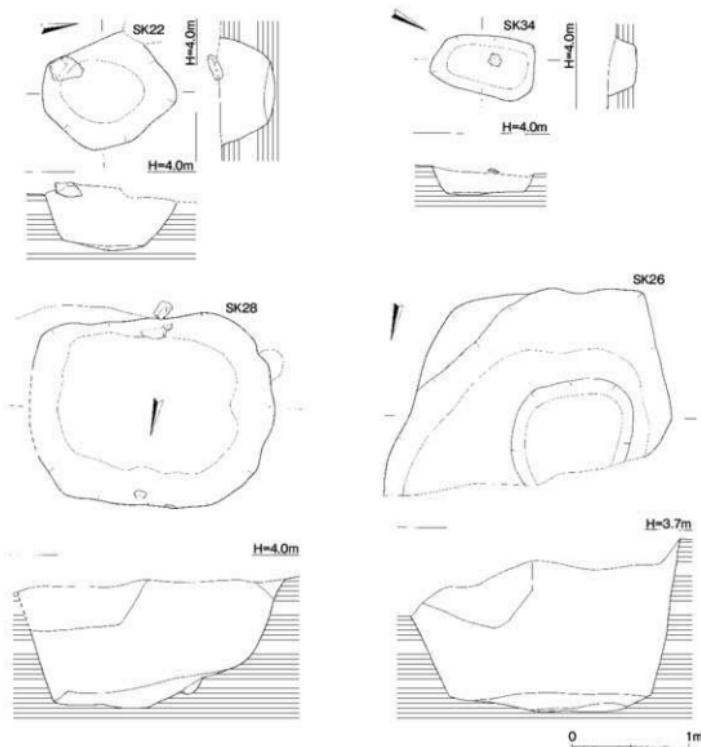
第4図 第1面および第2面調査区全体図 (1/80)

SK26（第5図） 調査区の北西隅に位置する。北側の大半が調査区外に続き、本来のプランは不明だが、現況で長軸2.2m、短軸1.5m、深さ約1.4mを測る。東側でSE30と重複し、これよりも新しい。

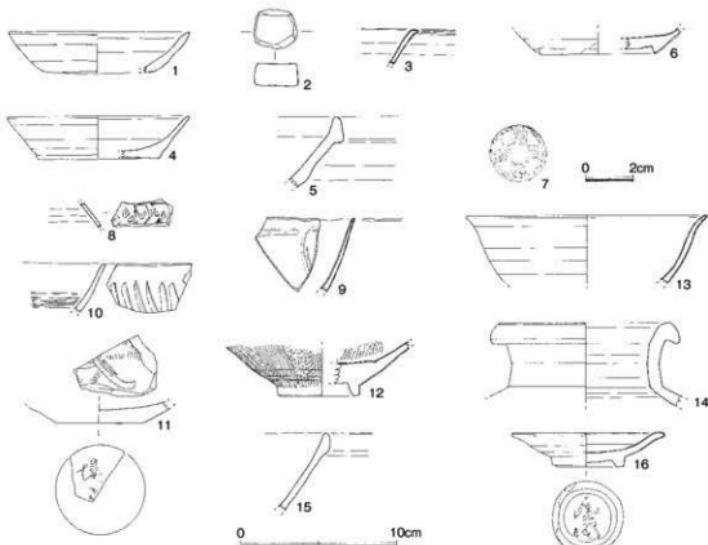
出土遺物（第6図4～7） 4は底部糸切りの土器器坏で、器面は内外面ともヨコナデ調整される。外底部に板状圧痕が残る。5は須恵質土器の鉢で、口縁部は「く」字状に屈曲し、内面は磨滅する。6は青磁壺の底部とみられ、底部は碁筒底風である。内面から外面体部下半まで施釉される。7は銅鏡で「開元通寶」（初鑄年621年）である。この他にも白磁碗IV類、龍泉窯系青磁碗I類、瓦等が出土している。以上の出土遺物から13世紀後半～14世紀前半の土坑と考えられる。

SK28（第5図） 調査区の中央部南寄りに位置し、東側の一部は試掘トレンチや攪乱により壊されるが長軸2.0m、短軸1.5mの隅丸方形形状を呈する。深さは0.7～1.0mを測る。

出土遺物（第6図8～14） 8は器種不明の綠釉陶器である。外面には雷文や幾何学的な文様を有し、明緑～暗緑色の釉が施される。胎土は灰色で緻密である。9は龍泉窯系青磁碗III類か。口縁端部には輪花を有し、外面には片彫連弁文が施される。10～12は同安窯系青磁である。10・12は碗で、10の外面体部には粗い綫の櫛目文、内面体部には数条の沈線が巡る。12の外面体部には細い綫の櫛目文



第5図 SK22・26・28・34実測図（1/40）



第6図 SK22・26・28・34出土遺物実測図（7は1/2、その他は1/3）

文、内面には短い櫛目文が施される。11は皿で、内面にはヘラ・櫛状工具により施される。全面施釉後、底部の釉が掻き取られ、底部には墨書を有する。13は白磁IX類の碗である。口縁端部は釉剥ぎされ、口秃げとなる。灰白色の釉が厚く施される。この他、白磁碗V・Ⅵ類、龍泉窯系青磁碗I類、中国陶器小口瓶、繩目叩きの瓦、埠等が出土している。以上の出土遺物から13世紀後半～14世紀前半の土坑に位置付けられよう。

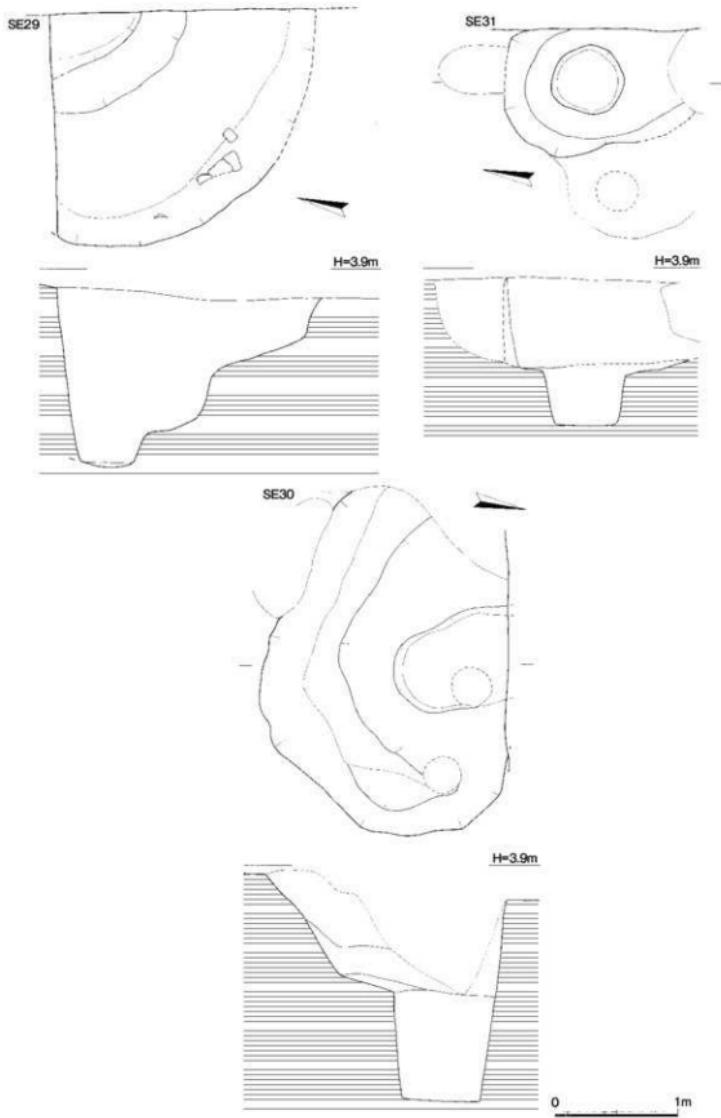
SK34（第5図） 調査区の南東隅付近に位置し、長軸0.8m、短軸0.5m、深さ0.2mで隅丸長方形を呈する。上層から白磁皿が伏せられた状態で出土した。

出土遺物（第6図14・15） 14・15は白磁である。14はⅢ類の壺で、口縁部は丸く折り曲げられる。15は皿Ⅲ-1類で、内面見込みの釉は輪状に釉剥ぎされる。高台見込みには「無□」と読める墨書を有する。この他に底部糸切りの土器皿、白磁碗Ⅳ類、滑石製石鍋、瓦等が出土している。以上の出土遺物から13世紀前半に位置付けられる土坑であろう。

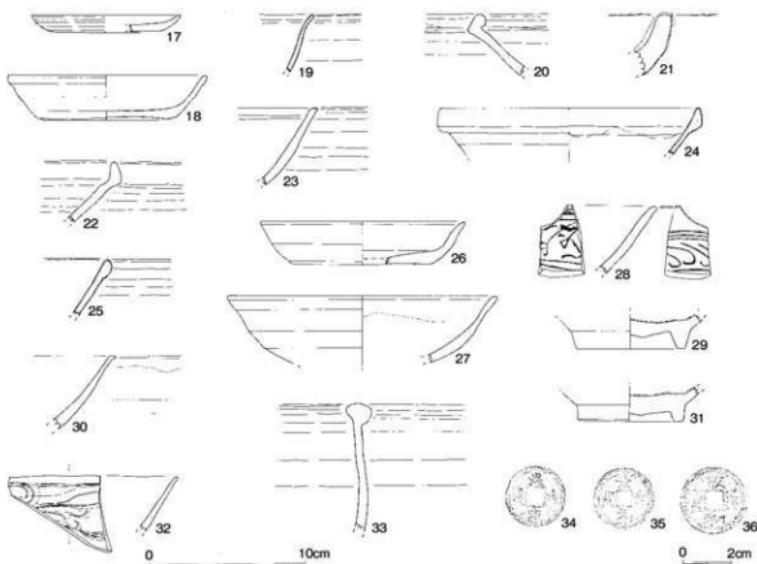
（2）井戸（S E）

SE29（第7図） 調査区の北西隅に位置し、大半は調査区外に続くが全体の1/4程度を検出した。南側の一部は攪乱により壊され、また調査時に掘り過ぎたため、國には調査区東壁で確認した掘り方のプランを破線で示した。径4m程に復元できよう。深さ0.5mと1.2m付近にテラス状の平坦面があり、その内側に現状で長軸0.7m、短軸0.5m程の掘り込みがある。全体の深さは1.5mを測る。

出土遺物（第8図17～21） 17・18は底部糸切りの土器皿・壺で、17の底部には板状圧痕が残る。19は龍泉窯系青磁碗Ⅲ類か。暗灰緑色の釉が施され、内外面無文である。20は青磁の壺で、口縁部は丸く折り曲げられ、「く」字状となる。口縁部内面と体部の境に目跡が残る。21は土製坩堝と考えられ、浅い皿形を呈する。内面から口縁部外面にかけて熔解物が厚く付着し、綠青が点在する。この他



第7図 SE29・30・31実測図（1/40）



第8図 SE29・30・31出土遺物実測図 (34～36は1/2、その他は1/3)

にも白磁皿V類、瓦質土器鉢、繩目叩きの瓦等が出土している。以上の出土遺物から、13世紀後半～14世紀初頭頃に位置づけられる井戸と考えられる。

SE30（第7図） 調査区の北壁際中央部に位置し、西側でSK26と重複し、これよりも古い。全体の2/3程度を検出した。現況で径2.7m程の円形もしくは楕円形を呈する。深さ約0.8mに平坦面を設け、その中央部に長軸1m以上、短軸0.8mの楕円形を呈する掘り込みがある。

出土遺物（第8図22～31） 22～25は掘り方、26～31は井戸側内出土である。22は東播系須恵質土器の鉢である。23は白磁碗V類か。口縁上端部は水平に仕上げられる。灰白色釉が施され、貫入がみられる。24は白磁碗IV類とみられ、やや扁平な玉線状口縁をもつ。25は青磁碗で、口縁部は玉線状を呈する。灰オリーブ色の釉が施される。26は底部糸切りの土師器坏で、器面は内外面ともナデ調整される。27は瓦器碗で、内外面ナデ調整、体部上半にはヘラ研磨痕跡が残る。内面の一部に黒斑がみられる。28は高麗象嵌青磁碗で、内外面に象嵌で文様が施される。29・31は白磁碗Ⅶ類の底部である。内面見込みは輪状に釉剥ぎされる。30は碗V類か。口縁部は屈折し、上端部は水平となる。全体に細かい貫入がみられる。この他に底部糸切りの坏、同安窯系青磁皿I類、青白磁合子、中国陶器四耳壺、瓦等の小片が出土している。以上の出土遺物およびSK26との新旧関係から、13世紀前半頃の井戸に位置づけられよう。

SE31（第7図） 調査区の南東隅で検出され、東側の一部は調査区外に位置するが、ほぼ全容が把握できる。南側でSK22と重複し、これよりも古い。径1.5m程の円形あるいは楕円形を呈する。深さ0.7m付近で平坦面を設け、径0.6mの円形の掘り込みを有する。全体の深さは1.2mを測る。

出土遺物（第8図32～36） 32は龍泉窯系青磁碗I～II類で、灰オリーブ色の釉が施され、内面

に片切彫りによる花文が描かれる。33は中国陶器の甕か。胎土は暗赤灰色で精良、暗褐色の釉が施される。口縁部上端、外面口縁部下半から体部の境は釉剥ぎされる。口縁部内面には目跡が残る。34～36は銅鏡である。34は「皇宋通寶」(初鑄年1038年)、35は「景德元寶」(初鑄年1004年)、36は「政和通寶」(初鑄年1111年)である。この他に瓦質土器鍋、白磁碗V類、同窯系青磁碗I類・皿I類、綠釉陶器、中国陶器無釉水注・褐釉壺、暗褐色釉甕、繩目叩きの瓦等が出土している。これらの出土遺物およびSK22との新旧関係より12世紀後半～13世紀前半の井戸に位置づけられよう。

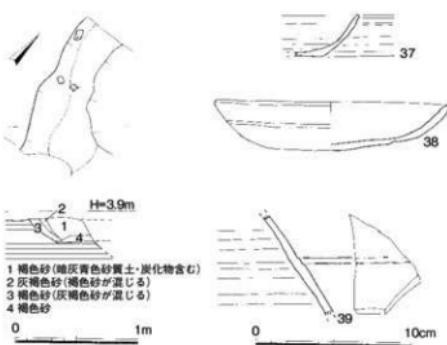
(3) 潟 (SD)

SD32 (第9図) 調査区の中央部や東寄りに位置する。南側はSK28、北側はSE29と重複し、これらよりも古く、東半部の大部分は搅乱により削平されている。SK28・SE29よりも古い。現状で長さ1.2m、幅0.3～0.6m程、深さ約0.2mを測る。

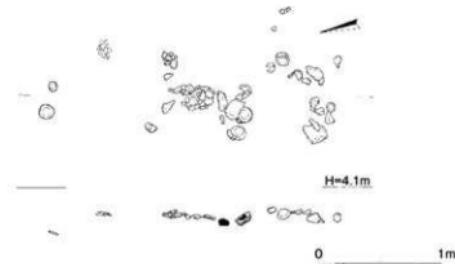
出土遺物 (第9図) 37・38は土師器坏で、37は底部静止系切り、38はヘラ切りである。ともに器面はナデ調整である。39は中国陶器四耳壺で、内外面に黄褐色の釉が施され、体部と頸部の境には1条の突帯が巡る。体部には横耳が貼付された痕跡があり、その下部には波状沈線が施される。この他に須恵器坏の小片が出土している。これらの出土遺物およびSK28・SE29との新旧関係により、12世紀後半～13世紀前半の溟と考えられる。

(4) 土師器集積遺構 (SX)

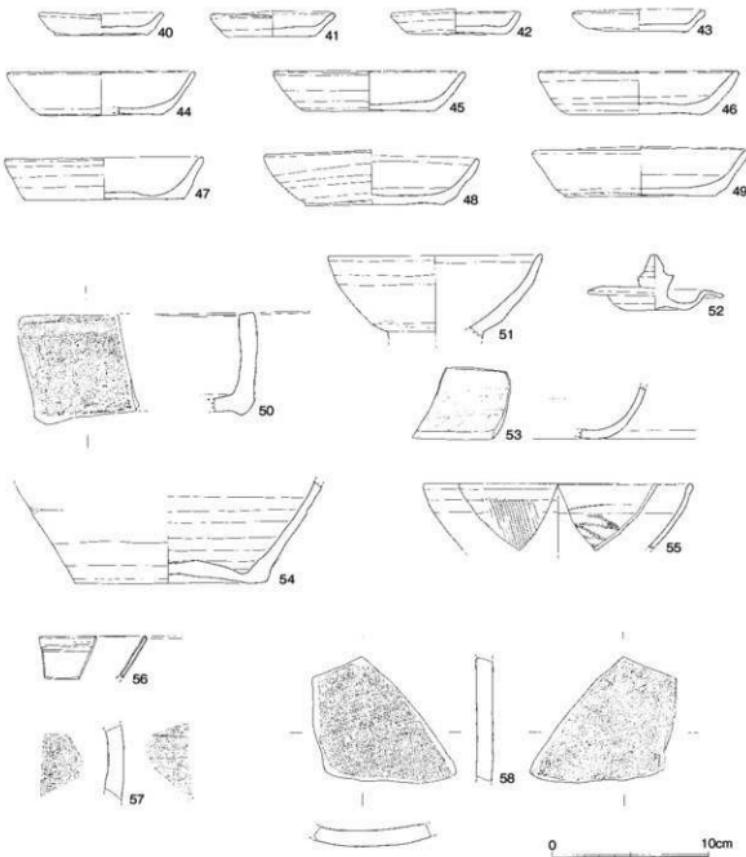
SX38 (第10図) 調査区の西端付近に位置する。長さ2.5m、幅1.2m程の範囲に完形個体を含む土師器皿・坏を主体として、多数の遺物、礫が出土した。また、本遺構は調査区西側一帯で検出されたSK22やSE31、ピット状遺構よりもやや上層で確認した。なお、以下に報告する出土遺物の50～58は、



第9図 SD32実測図および出土遺物実測図 (1/3)



第10図 SX38実測図 (1/40)



第11図 SX38出土遺物実測図（1/3）

この遺構の周辺で出土したものだが、包含層中の遺物も含まれている可能性が高い。

出土遺物（第11図） 40～49は底部糸切りの土器皿・壺で、40～43は口径8cm前後を測り、44～49は口径12.2～13.5cmを測る。すべて器面は内外面ともヨコナデ調整され、内底部にナデ調整を加えるものもある。47～49の底部には板状圧痕が残る。50は瓦質土器火舎で、体部上位には雷文状のスタンプが施される。内外面底部付近は磨滅が著しい。51は天目碗で、内面から体部外面下半まで、褐色釉が薄く施される。52～54は中国陶器である。52は蓋で、宝珠状のつまみを有する。上面には暗褐色釉が施され、目跡が残る。53は盤で、内面は淡黄釉が薄く施され、鉄絵による文様が描かれる。54は壺底部か。内面から外面体部下位まで茶褐色釉が施され、体部下位の露胎部分には目跡が残る。55は同安窯系青磁碗I-1b類で、外面体部に細かい縦の櫛目文、内面にはヘラ・櫛状工具に

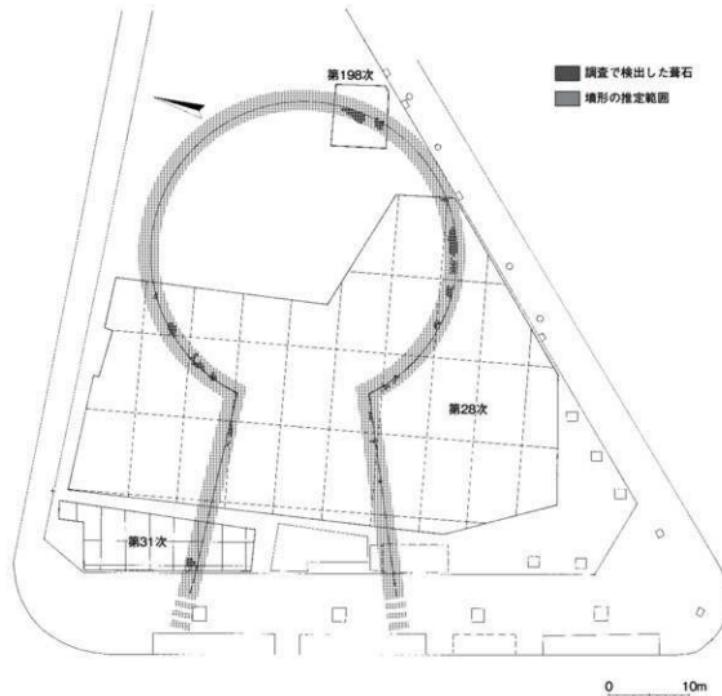
よる施文を有する。56は龍泉窯系青磁碗で、内面体部上位には片切彫りとヘラによる沈線が巡る。この他、土師質の鍋、瓦質土器鉢、瓦等が出土した。これらの出土遺物から14世紀代の遺構と考えられる。

2) 第2面(第4図)

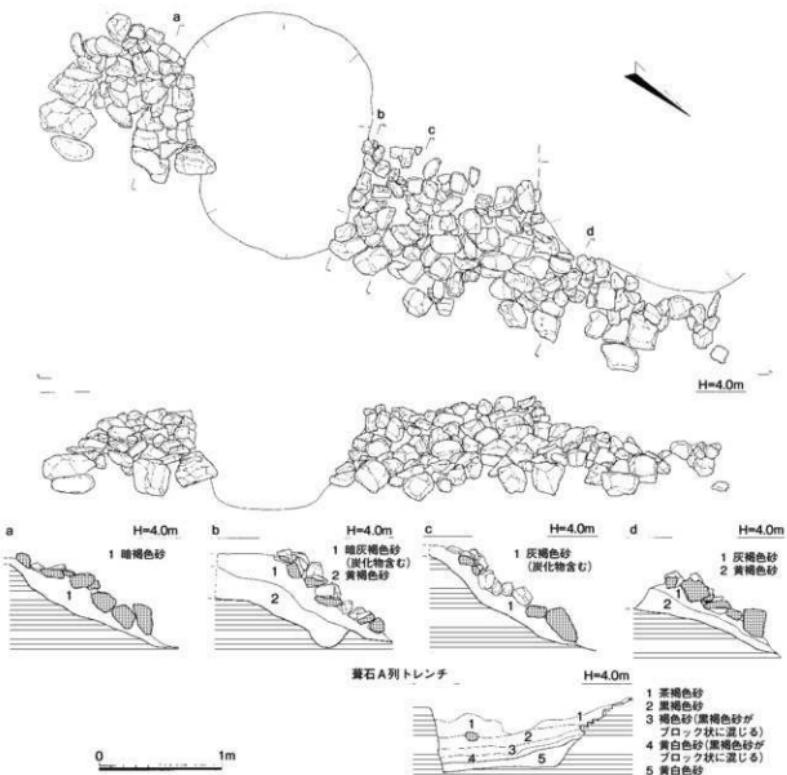
第2面で検出した遺構は、第28次・31次調査区で確認されていた前方後円墳(博多1号墳)の後円部葺石と周溝の一部とピット状遺構2基である。これらの遺構に伴う遺物は少なく、円筒・形象埴輪片・須恵器片が出土したのみである。なお、中世の遺構内・包含層中からも埴輪片が出土している。

(1) 前方後円墳(博多1号墳)

葺石A列・葺石B列(第13図) 本調査区では、中世の土坑SK28に分断される形で、2箇所の葺石を確認した。第1面調査中に南北方向に並ぶ石列を確認し、これまでの調査から前方後円墳の検出が予想されたため、第1面の遺構を調査後、トレーニング(葺石A列トレーニング)を設定して一部を掘り下げたところ、葺石が比較的良好に残存していることを確認した。葺石は調査区のはば中央付近を北から南へ向かって弧を描きながら斜めに横切るように長さ約5m、幅0.5~1.2m程が検出されたが、後世の削平を受け、墳丘はほとんど残存せず、これまでに確認されている葺石と同様に、基底部周辺の



第12図 周辺調査地の葺石検出状況および博多1号墳復元図(1/600)



第13図 舂石A列・B列実測図（1/40）

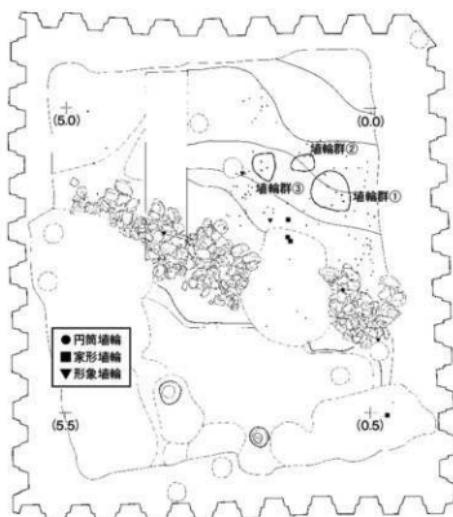
葺石が断続的に残っているという状況である。葺石は高さ1.2～1.3m程が残存しており、後円部の東端に近い南東側弧の一部である。

便宜的に北側を葺石A列、南側を葺石B列として調査したが、2箇所の葺石の配列に大きな差ではなく、ほぼ原位置を保っているものと考えられる。裾部最下段の石には30～50cm程度の大きめの角礫が用いられ、その上に10～30cm程の角礫・円礫が積まれている。使用されている石材は、ほとんどが礫岩と砂岩で、わずかに、花崗岩や閃緑岩も含まれる。これまでの調査で確認された葺石で最も残存状況の良い、第28次調査の後円部南側葺石（Ⅱ区F群）の状況と比較すると、最下段の石が一部やや東側にずれている部分や抜けているものもあるが、葺石の構築方法は同様であり、積むというよりは、貼るに近い。しかし、整然とした第28次検出葺石より、やや雑然とした印象である。また、葺石の構築については、積み方の目が縱方向ではなく、斜め下方に揃っている状況が看取され、基底石としてやや大きめの石を一段据えた後、埴丘の斜面に対し、斜め方向に石を積んでいった可能性がある。地山と盛土が砂であり、崩れやすかったために採られた方法であろうか。

墳丘を斬ち割って確認した葺石および墳丘の各断面をみると、葺石下の墳丘は大きく2層に分かれ。葺石直下の1層が暗灰褐色～灰褐色砂で、炭化物を含み旧表土とみられる。第2層は黄褐色砂で、その下は黄白色砂の基盤層となり、1層の旧表土から下は地山整形がなされているものと考えられる。墳丘裾部の立ち上がり角度は29°前後で、基底部（葺石最下段）の標高は3.1～3.2m程である。また、調査区壁や葺石A列トレンチで確認された墳丘裾部最下段から西側から東側に向かって緩やかに下がる土層は、周溝とその覆土であると考えられる。葺石A列トレンチの1層は茶褐色砂、2層は黒褐色砂で厚く堆積する。3層は褐色砂に黄白色細砂をブロック状に含み、4層は3層よりもさらに多くの黄白色細砂を含む。5層は黄白色砂の基盤層で、4・5層の境が周溝の掘り方を示しているものと思われる。周溝は基底部に沿って巡り、長さ約5m、裾石からの最大幅約3m分を検出した。なお、今回検出できたのは、周溝が西から東に向かって緩やかに傾斜していく落ちの部分であり、東側の立ち上がり部分は確認できておらず、周溝はさらに調査区外に広がっているものと考えられる。

第12図に、第28・31次調査区で確認された葺石と本調査区で検出した葺石の位置、およびそこから推定される墳形の推定範囲を示した。第28・31次調査でも復元がなされているが、そこで推定された範囲と大きな差はない。これまでの調査成果と本調査で得られた知見をもとに推定される前方後円墳の規模は、全長56m以上、後円部径38～40m、前方部幅25m以上、くびれ部の幅13～17mとなる。後円部は正円をなしていないようであり、東西にやや長いとみられる。主軸方位はN-70°-Eにとる。なお、内部主体について窺い知ることのできるような石材や遺物等は出土しなかった。

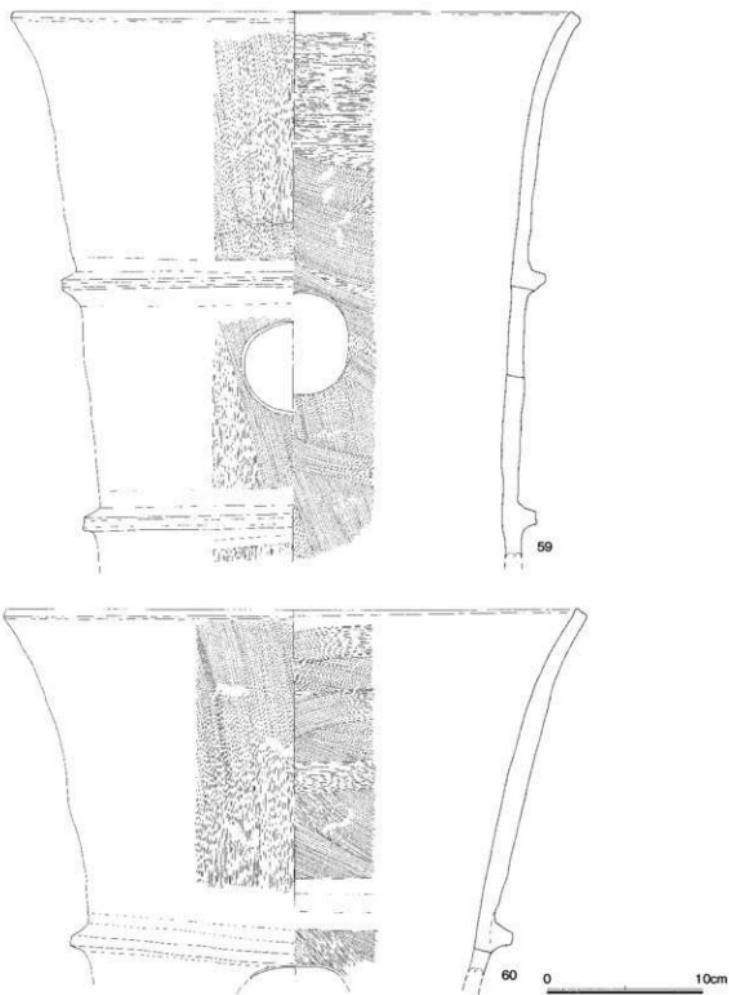
出土遺物（第15～19図） 今回の調査で確認した葺石と周溝覆土および中世の遺構から、コンテナ1箱分の埴輪片と数点の須恵器片が出土した。埴輪片は、葺石上からも出土したが、多くの埴輪片は、後世の削平や擾乱があまり及んでいない調査区の南東側に集中して分布し、墳丘の崩落土の可能性のある茶褐色砂、周溝覆土の黒褐色砂からそのほとんどが出土した。また、第1面で調査した中世の遺



第14図 墓輪出土位置図（1/80）

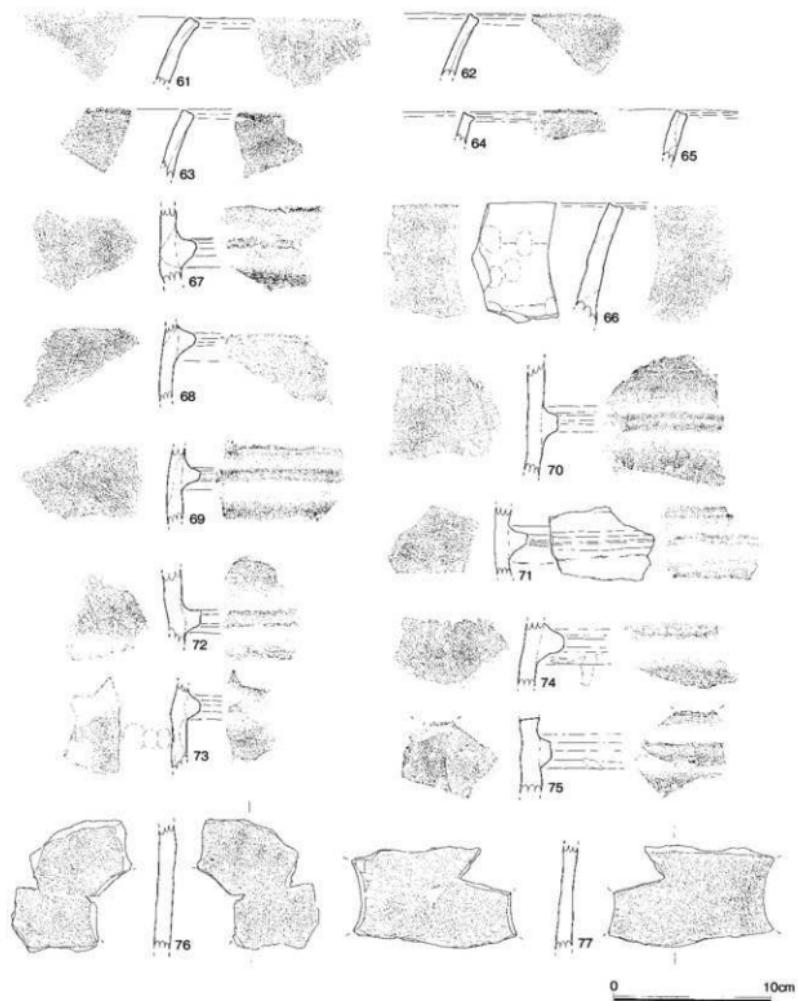
構からも少量が出土している。埴輪片については、できるだけその出土位置と高さを記録するように努め、第14図には平面的な分布状況を示している。図中の埴輪群①～③は周溝覆土の黒褐色砂層で検出され、2～3個体分とみられる円筒埴輪片がまとまって出土し、それぞれに接合関係がある。また、その他の位置から出土した埴輪片もこれらの個体と接合するものもあった。

以下に、出土した埴輪片の主なものと須恵器片について報告する。59・60は円筒埴輪で、主に上述した埴輪群①～③で出土した埴輪片を接合したものである。59は口縁部から2段目のタガまで復元できた。口縁部は外反し、口縁端部はナデによる凹面をもつ。タガは比較的大きく突



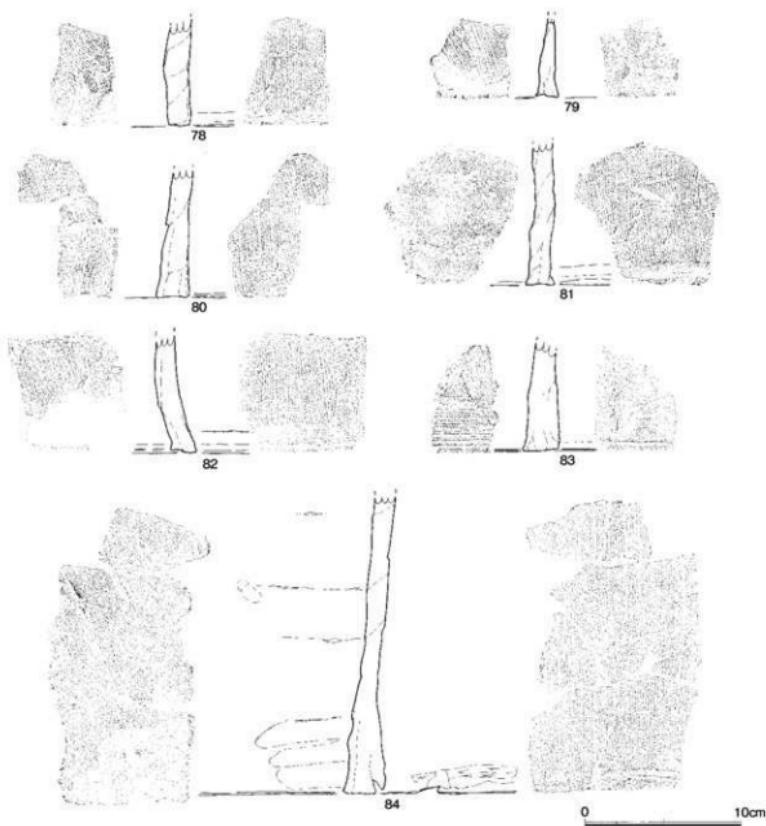
第15図 墓輪実測図（1）（1/3）

出し、断面台形状をなし、端部はナデによる凹面が形成される。スカシ孔は円形で、2段目の相対する位置に一对ずつ、計4個を有する。外面は、タテハケによる一次調整が施され、内面は1段目口縁部付近がヨコハケ、タガ周辺はヨコハケ後ナナメハケ、2段目をタテハケ後粗いナナメハケで調整される。外面には黒斑を有し、また、赤色顔料が塗布されているが、磨滅により剥落してしまった部分も多い。口径約35cm、胴部径約27cmを測り、高さ34cm程度が残存する。60は口縁部から2段目の一



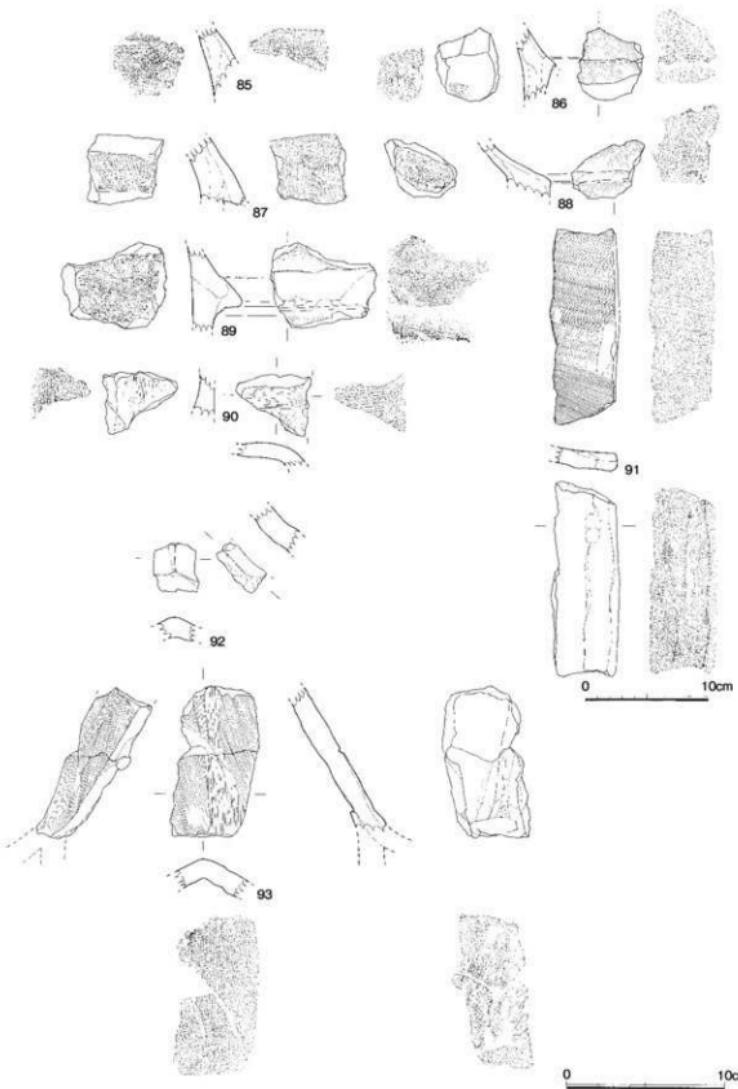
第16図 墓輪実測図（2）（1/3）

部まで復元された。59よりもやや大ぶりで、粗雑な印象を受ける。やや歪んでいるが、口径約37cm、胴部径約25cmを測り、高さ25cm程である。口縁部やタガの形態、器面調整等は59とはほぼ同様だが、タガ貼付部の内面には強いヨコナデがみられ、一次調整のハケメがナデ消されている。外面には黒斑を有し、赤色顔料が塗布されているが、磨滅のためほとんど確認できない。

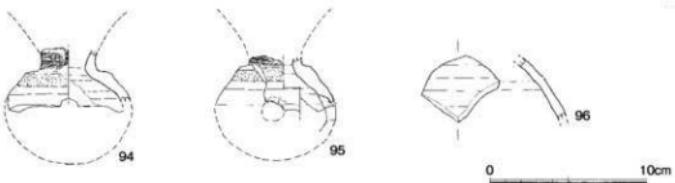


第17図 塗輪実測図（3）（1/3）

第16図61～66は円筒埴輪の口縁部である。端部はすべて強いナデにより凹面をなしている。64の端部は、わずかに外方につまみ出されたような形態をとる。61は外面のタテハケ調整が丁寧にナデ消されたものとみられ、縦に2本の沈線が施されている。66は明橙色を呈し、やや硬質に焼成される。内面には粘土紐の接合痕が残り、細いヨコハケ調整の後、ヨコナデと指オサエが施される。また、赤色顔料は塗布されていないとみられる。67～75はタガ部分の破片である。タガは、比較的大きく突出し、断面形態は台形状を呈し、ヨコナデにより断面M字状を呈するものもある。75以外の外面調整はタテハケによる一次調整のみで、内面はタテハケ後部分的にヨコハケやナメハケにより調整され、73のように指オサエが施されるものもある。外面には赤色顔料が塗布されている。75は明橙色を呈し、やや硬質な焼成で、口縁部66と類似する。タガは整った断面台形状を呈するがあまり突出しない。外面はタテハケ後、ヨコハケによる二次調整が施される。円形のスカシ孔がある。赤色顔料は塗布され



第18図 塗輪実測図（4）（91は1/4、その他は1/3）



第19図 須恵器実測図（1/3）

ていない。76・77は胴部片で、円形のスカシ孔がある。77には2箇所が確認でき、1段に4個のスカシ孔があったとみられる。

第17図78～84は底部片である。外面はタテハケ、内面はタテハケ・ナナメハケによる調整が施され、83のように粗いヨコハケが施されるもの、84のように粗いケズリが施されるものもみられる。端部は、ヘラ状工具により切り離されたままか、粗くナデ調整されたものもある。赤色顔料が認められるものも多いが、上部に塗られたものが垂れているもので、土中に埋まる部分には顔料は塗布されていないようである。

第18図には円筒埴輪ではないと考えられるものと家形埴輪とみられる破片を図示した。85～87・89は通常のタガとは異なり、断面三角形状のやや下方に下がるタガをもつと考えられるものである。タガの上面にもタテハケが施され、89はタテハケがナデ消されている。外面にはすべて赤色顔料が塗布されており、円筒埴輪と比較すると器面の調整が丁寧である。88は形象埴輪片とみられるが種別は不明である。接合痕をみると厚い板状のものとの接合部のようにみえる。90はやや丸みを帯び、曲線があるが、形態は不明である。内外面ともやや細いハケメ調整がなされ、外面には赤色顔料が塗布される。91～93は家形埴輪の一部とみられる。91は板状の破片で、寄棟屋根の軒先部分と推定される。上面は細いタテハケが施され、赤色顔料が塗布される。端部は丁寧に面取りされている。内面はナデ調整されるが、粘土の接合痕が残り、一部指オサエも施される。92・93は寄棟屋根の軒先と壁の接合部付近と考えられる。93の上面はタテハケによる調整がなされ、赤色顔料が塗布されている。

この他、多くの埴輪片が出土しているが、そのほとんどは円筒埴輪片で、断定できたものはないが朝顔形埴輪片である可能性もある。埴輪片の中には黒斑を有するものが多くみられ、外面二次調整が行われず、一次調整のタテハケのみのものが主体である。このことから、出土した埴輪の多くは川西編年のⅡ期、5世紀前葉に位置づけられよう。出土した埴輪には図示した66・75のように無黒斑で明橙色を呈し、一次調整のタテハケ後、二次調整のヨコハケを施す個体も存在する。これらは、川西編年Ⅳ期に該当するものであろう。

第19図94～96は埴輪とともに出土した須恵器片である。94・95は窓で、埴輪が多く出土した、茶褐色砂および黒褐色砂層から出土している。全体の特徴から同一個体と考えられるが接合はしない。頸部には櫛状工具による波状文が密に施される。内外面には自然軸がかかり、ガラス質で明緑色を呈する。胎土は灰色で精良である。95の体部には径1cm程の穿孔がある。96は壺の肩部付近の破片とみられる。内面は灰青色を呈し、外面には自然軸がかかり、やや緑味を帯びた灰青色である。胎土は灰白色で緻密である。96は葺石の直下に認められた暗灰褐色土と、同じ土層から出土したが、中世の遺構によって削平を受けている部分の断面に近く、混入品か原位置を保って出土したものか判断が難しい。いずれにしても、これらは初期須恵器あるいは陶質土器である可能性もある。

IV. 結語

今回の調査で確認できた遺構は、古墳時代中期（5世紀）、中世前半（12世紀後半～14世紀前半）の大きく2つの時期に分けられる。出土遺物のみをみると、古墳時代以降のものとして古いものは、8世紀代の須恵器等が散見されるが、古墳時代以降12世紀前半まで明確に時期を比定できる遺構は検出されなかった。14世紀以降では15～16世紀代の遺物はみられるものの、遺構としては確認できていない。

古墳時代の遺構としては、前方後円墳（博多1号墳）の葺石および周溝が検出され、これまでに行われた第28次・31次調査で確認されていたものを追認する形となった。復元される墳丘規模等に大きな変更はないが、全長56m以上、後円部径38～40m、前方部25m以上、くびれ部の幅13～17mの規模となり、福岡平野では那珂八幡古墳、老司古墳に次ぐ規模となる。調査で出土した埴輪は、円筒埴輪や家形埴輪を含む形象埴輪で、これらのほとんどは外面の二次調整が行われず、タテハケによる一次調整のみで、黒斑を有するものが多くみられる。これらの特徴から川西宏幸氏による編年¹⁾のⅡ期に位置づけられ、実年代は5世紀前葉となろう。また家形埴輪については、吉留秀敏氏による復元案が提示されており²⁾、参考となる。出土した埴輪には外面二次調整（B種ヨコハケ）を行い、黒斑が認められない川西編年Ⅳ期に該当する、後出のものもわずかながら含まれている。同時期の埴輪は、本調査区の東側に位置する第109次調査区で確認され、また同調査区では前方後円墳の可能性を有する遺構が検出されている。このことから、本調査区で確認されたⅣ期に下る埴輪は混入したものである可能性が高いと言えよう。さらに、埴輪とともに初期須恵器あるいは陶質土器の可能性を有するものがわずかではあるが出土しており、古墳の築造年代や古墳築造に関わる祭祀、葬送儀礼等を考えるうえで重要な資料となろう。福岡平野における前方後円墳の系譜については、吉留氏による記述³⁾があり、同氏は平野内を古墳の分布状況から那珂川上流域、那珂川下流域、御笠川流域の3地域に区分したうえで、さらに5群の小地域を設定している。地理的にみれば、本古墳は那珂川下流域の博多グループに属し、方墳である博多2号墳に後出する系譜上に位置付けられ、第109次の前方後円墳は、博多1号墳に後出するものと捉えられる。吉留氏は福岡平野の首長系譜を通して、各地域間の変動が大きく、1グループに3代以上連続して前方後円墳が築造されないことから、輪番的な首長系譜を示すことを指摘している。本古墳は砂丘上という、古墳築造には不向きに思える立地であるにも関わらず、大規模な前方後円墳が築造されている。そのような博多1号墳築造の背景、また首長の性格やその系譜については、埴輪や須恵器等の出土遺物、周辺古墳との比較検討も踏まえて明らかにしなければならないが、今後の課題としておきたい。

註

- 1) 川西宏幸 1978 「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64-24
- 2) 福岡市教育委員会 1988 「4.博多1号墳出土の家形埴輪」「井尻B遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書 第175集
- 3) 吉留秀敏 1992 「2.福岡平野における首長墓系譜について」「那珂5」福岡市埋蔵文化財調査報告書第291集

写 真 図 版



(1) 第1面調査区全景（東から）



(2) 葦石検出状況（南東から）



(3) 葦石検出状況（南から）



(4) 葦石A列（東から）



(5) 葦石B列（東から）



(6) 葦石A列 トレンチ南壁土層（北から）



(7) 塙輪群①～③出土状況（南東から）



(8) 葦石B列 塙輪出土状況（東から）

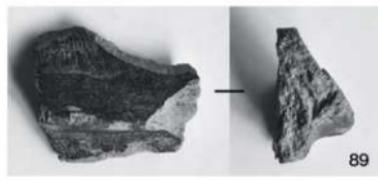
図版2



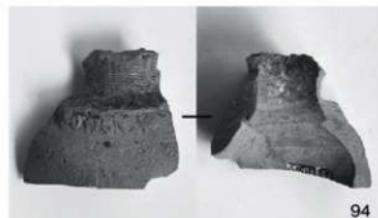
59



60



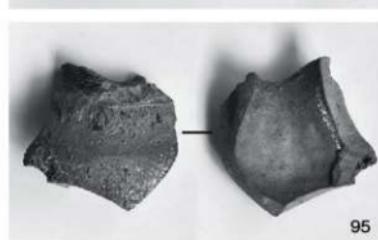
89



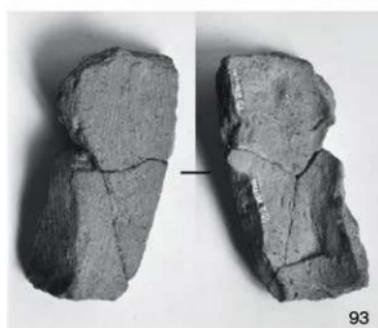
94



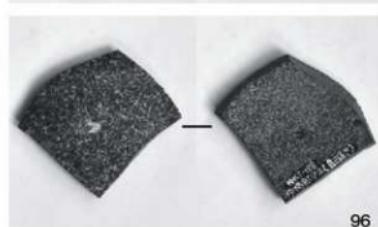
90



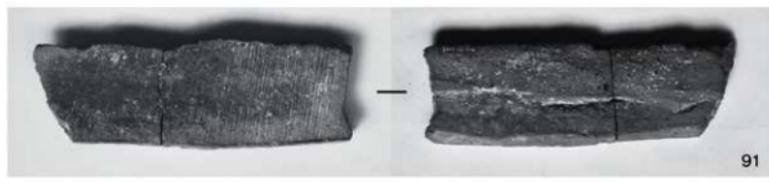
95



93



96



91

報告書抄録

ふりがな	はかた 152 -はかたいせきぐんだい 198 じちょうさはうこく-						
書名	博多 152						
副書名	博多遺跡群第 198 次調査報告						
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第 1270 集						
編著者名	吉田大輔						
編集機関	福岡市教育委員会						
所在地	〒 810-8621 福岡県福岡市中央区天神 1 丁目 8 番 1 号 TEL 092-711-4667						
発行年月日	2015(平成 27) 年 3 月 25 日						
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 m ²	発掘原因
博多遺跡群	福岡県福岡市 博多区御供所町	40132 020120	33° 35' 39"	130° 24' 55"	20130917 20131023	43.3	記録保存 調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
博多遺跡群	古墳 集落	古墳時代 平安時代 鎌倉時代 室町時代	前方後円墳(葺石・ 周溝)、井戸、土坑、 ピット	埴輪、須恵器、土師器、 瓦器、須恵質土器、瓦質 土器、国産陶器、中国產 陶磁器、朝鮮產陶器、 石製品	古墳時代中期の前方 後円墳の一部を確認		
要約	博多海岸の古砂丘上に立地する前方後円墳(博多 1 号墳)と中世都市道路の調査である。調査では、5 世紀前葉に位置づけられる前方後円墳の後円部南東側葺石と周溝の一部を確認し、古墳に伴う遺物として、円筒埴輪、人形埴輪、須恵器が出土した。古墳時代中期以降では、8 世紀代の遺物も散見されるものの、古代から 12 世紀前半までに位置づけられる明確な遺構は確認されていない。中世の遺構としては、12 世紀後半から 14 世紀前半までの井戸、土坑、溝が検出された。						

博 多 152

—博多遺跡群第 198 次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第 1270 集

2015(平成 27) 年 3 月 25 日

発 行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目 1 番 8 号

印 刷 株式会社 西日本新聞印刷
福岡市博多区吉塚八丁目 2 番 15 号